

【にんげん部門・佳作賞】

そのままの私で生きていい

飯田女子高等学校 2年 宮嶋 こころ

私は学校で、あるときから友達の輪の中に入りずらくなつたと感じるようになりました。気づけば一人になつてしたり、話しかけても軽く流されたり。誰かがあからさまに何かを言うわけではないのに、自分だけがそこにいないうな、目に見えない壁を感じました。「私は何か悪いことをしたのかな。」「必要とされていないのかも。」そんな思いが心の中で大きくなり、自分の居場所がわからなくなつていきました。

そんなとき仏教の学びが心に響きました。お釈迦さまは王子という恵まれた立場にいながらも生老病死の苦しみから逃げず、「人はなぜ生き、苦しむのか」という問いを持ち、真実を求めて出家されました。その話を聞いた時、「私のように悩む存在」こそ、仏教が向き合ってきた人間像だったのだと感じ、少しほっとしたのを覚えています。さらに、親鸞聖人の教えは、そんな私にそっと寄り添ってくれました。「こんな自分ではダメだ」と思っていた私に、「そんなあなたを見捨てない仏がいる」と語りかけてくれる声が、心に届いた気がしました。

仏教では「人として生まれることは本当に貴重なこと」だと教えられています。それは何も完璧な人になるためでなく、苦しみながらも問いをもち、仏さまの願いに出会っていくことのできる存在だからです。

仲間はずれにされたと感じた日、ひとりだった日、涙がこぼれそうだったあの日の私も、阿弥陀仏のまなざしの中にいたのだと思います。これからも、迷いながらも仏の教えに耳をすまし、「この私が生きていい」と感じられる道を歩んでいきたいと思います。